

## — 次回第 122 回例会のご案内 —

下記のとおり第 122 回例会を開催いたします。どうぞ多数お集まりください。

日時：2018 年 3 月 21 日（水祝） 14：30～17：15

会場：広島大学（東広島キャンパス）学生プラザ4階 多目的室1・2

※ JR西条駅から「広島大学」行のバスに乗って「広大西口」下車（所要時間 約 15 分）  
総合科学部C棟北側の白い建物です（バス停より徒歩5分）。

※ 時刻表は広島大学ホームページから検索できます。

### <研究発表要旨>

#### ① 谷口仙花の描いた女性像—戦前の作品を中心に

角田知扶（呉市立美術館学芸員）

日本画家谷口仙花（1910-2001、本名富美枝）は、川端龍子率いる青龍社展で画壇にデビューし、斬新な着想と確かな描写力で女性を生き生きと描き出し、世間の注目を集めた。仙花は、女流画家がまだ珍しい時代、時代の寵児と持ち上げられ、女性蔑視の思想に苦しみながらも、独立し銀座で二度の個展を開催するなど、画壇への挑戦を続けた画家である。1944（昭和 19）年に日本画家船田玉樹と結婚、呉市に疎開。玉樹と離婚後、1955（昭和 30）年に日系人男性と再婚するため渡米。日本画壇に復帰することなく、米国で死去した。

仙花がおよそ 10 年を過ごした呉市やその周辺地域には、仙花の足跡が色濃く残り、呉市では多くの作品が見つかっている。だが戦前の華々しい活躍に比して現存する作品が少なく、今日その名を知る人は少ない。

本発表では、歴史に埋もれた画家とも言える仙花の画業を掘り起こし、仙花の描いた女性像、特に「働く女性」やモダンガールなど女性の表象に焦点を当て、当時の時代背景や画壇における評価をふまえつつ、仙花の女性観や社会観について考察する。

また、現在判明している限りの仙花の作品と、彼女が多く残した文章を振り返りながら、表現者としての姿勢と画家・谷口仙花の目指したものについて検証し、今後の仙花研究の必要性を提示したい。

#### ② 明治期の広島における洋楽普及のネットワーク—一次史料の調査をもとに—

能登原由美（「ヒロシマと音楽」委員会）

現在、日本で耳にする音楽の多くは、明治期に入り欧米から取り入れた音楽をもとにしたものである。開国により欧米の文化に触れた日本は、音楽についても政府主導の下、軍事、教育の場を中心に西洋の音楽（以後、洋楽と略）を普及させる政策を行った。とはいえ、全く異質の文化を浸透させるには相当の時間と労力を要したであろうことは想像にかたくない。とりわけ、広島のような地方都市に対して中央政府の方針や意向がどのように伝達されたのか、交通網や情報網が発達していなかった当時の社会状況を鑑みながら考える必要があるだろう。明治維新から 150 年を迎える今年、日本への洋楽流入が本格化してから 150 年という年でもある。そこで本発表では、日本における洋楽 150 年の歴史の中でもその草創期に当たる明治期に焦点を当て、新しい音楽文化が地方の社会に浸透していくまでの過程について明らかにする。

近年、日本における洋楽の普及と受容に関する研究は、東京を中心としたものから各地方都市における研究へと広がりつつあるが、広島については人物や団体などに焦点を当てた個別研究にとどまっている。そこで、本研究では「普及」という視点から全体を俯瞰するべく、新聞・雑誌などの一次史料の調査を行った。その結果、中央から洋楽が伝達されるネットワークにおいて学校教育界と民間では大きく異なることが明らかとなった。本発表ではさらに、こうした違いが洋楽の普及と浸透にどのような意義をもつのかについても考察を試みたい。